ディアスポラの連帯意識が醸成される場

―マルセイユにおけるムリッド・イスラーム共同体の事例から―

榎　並　ゆかり[†]、新　山　智　基[‡]

はじめに

近年、欧州でISIS（イスラム国）に呼応する形でテロが頻発している。テロの首謀者としてアフリカ系の移民第二世代がクローズアップされ、そのアイデンティティが問題になっている。フランス生まれのアフリカ系の若者（移民第二世代）はフランス社会の中で孤立感を深めていると言われている。親世代が移動した当時のフランスの移民政策はかつてどうであったのか。

本稿で事例として取りあげるムリッド・イスラーム共同体は、植民地時代にセネガルで誕生したイスラーム神秘主義教団の一つで、セネガル国内では第二の勢力を持つ教団とされている。しかし、筆者が海外各地で出会うセネガル出身者の多くがムリッド（信徒）である。なぜ、ムリッドの国際移動が促進されたのか。筆者がムリッド・イスラーム教団に最初に関心を持った理由はここにある。筆者は、セネガルの農村研究を出発点に、対象者のトランスナショナルな移動と交易ネットワークに関心を持ち、ムリッド・イスラーム共同体（仏語：la Communauté mouride, 英語：Murid Islamic Community）のトランスナショナル・ネットワークに関する研究を行ってきた。

本稿で調査地として選定したマルセイユはフランスで最も移民の人口比率が高い古い港町である。先行研究によると、セネガル移民がフランスで最初にコミュニティを形成したのがこのマルセイユであった。ムリッド・イスラーム共同体もマルセイユから欧州各地に拡大していった。マルセイユのムリッド信徒は、布教の拠点としてモスクを建て、都市の信徒組織であるダイラ（dahira）を形成し、本国セネガルからムリッドの宗教指導者を定期的に呼び寄せるなどして、第二世代の教育にも熱心に取り組んだという。

なぜ、本国では第一勢力ではないムリッド・イスラーム共同体が海外でこれほど目立つ存在になり得たのか。ムリッド・イスラーム共同体がその移動を促進し連帯をつくりだす背景に何があるのか。筆者のこれまでの研究で、ムリッドは、ダイラと呼ばれる信徒コミュニティの中で強い連帯感、ムリッドとしての自覚、生き方の指針を得ていることを明らかにしてきた。では、マルセイユでもやはりそうした活動が行われているのであろうか。マルセイユの移民コミュニティの歴史は古く、セネガル出身者の移動の波は幾重にも重なっているため、古参の移民と新規移住者の間にギャップはないのか。信徒組織関係者、商店主、若者などへのインタビューと参与観察から、ムリッド・イスラーム共同体の活動と人びとの行動パターンを調査した。調査の結果、人びとは意図的に集まる場（空間）を創出していることが明らかになってきた。筆者は、こうしたインフォーマルな集まりを「サロン」と名付け、公的な集まりの場・ダイラと区別し、それぞれの役割と意義について検討を試みる。

† 京都中央看護保健大学校非常勤講師、龍谷大学地域協働総合センター教育プログラム研究開発補助員（PA）
‡ 神戸国際大学経済学部非常勤講師

1．受入国フランスの移民政策とアフリカ系コミュニティの抱える課題

（1）国際的な移民の実態

国際移住機関（International Organization for Migration：IOM）が定義している移民とは、「当人の①法的地位、②移動が自発的か非自発的か、③移動の理由、④滞在期間に関わらず、本来の居住地を離れて、国境を越えるか、一国内で移動している、または移動したあらゆる人」[1] のことを指す。世界的に移民をみると、図１のように伝統的に移民を多く受け入れている国（伝統的な国際移民の中心地）と国際／国内移民の出所国（国際的または国内移民の出所地）に加えて、新たな移民先（国際的に移民が増加している新たな中心地）が増加している。新たに増加している移民先には、経済成長の著しい東アジアや南アフリカ、インド、ブラジルなどの新興国や、シリアや北アフリカからの移民・難民の受け入れが増加しているヨーロッパ東部が挙げられる。また、伝統的な移民の受け入れ国は表１のように北アメリカ、ヨーロッパおよびオーストラリアである。

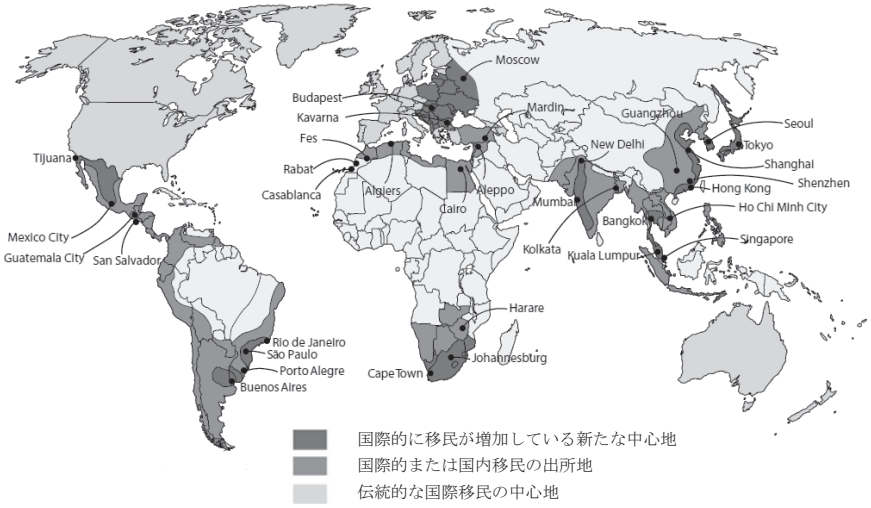

図１：世界的に多様化する移民先

＜出所＞ International Organization for Migration (IOM). (2015), ‘World Migration Report 2015-Migrants and Cities: New Partnerships to Manage Mobility,’ International Organization for Migration, p.37.

（2）フランスの移民政策

フランスでは、EU 加盟国を除き二国間協定を締結していない国の国民が３ヵ月以上滞在する場合に滞在許可書が必要になる。滞在資格には、学生や研究者、労働者などに発行される一時滞在許可（cartes de séjour temporaire）と正規滞在許可（carte de resident）があり、外国人は原則毎年滞在許可書を更新しなければならず、５年が経過すると10年有効の許可書が交付される。[2]

アフリカの旧植民地となっていたセネガルやベナン、ブルキナファソ、カーボベルデ、コンゴ、ガボン、モーリシャス、チュニジア、カメルーンなどの国々では、労働移民や若い専門家との交流に関する二国間協定（Accords bilatéraux sur les migrations professionnelles et échanges de

1）「国際移住機関：「移民」の定義」http://www.iomjapan.org/information/migrant_definition.html（2017年２月14日閲覧・取得）

2）「労働政策研究・研修機構：主要国の外国人労働者受入れ動向（フランス）」http://www.jil.go.jp/foreign/labor_system/2015_01/france.html#link_01（2017年２月19日閲覧・取得）

表 1　恒久的な移民の流入（2013年）

国　　名	移民数	国　　名	移民数
アメリカ	989,910	韓国	66,688
ドイツ	468,823	オーストリア	65,022
イギリス	290,956	ノルウェー	60,313
フランス	259,833	ベルギー	60,303
カナダ	258,619	日本	57,317
オーストラリア	253,492	メキシコ	54,440
イタリア	245,812	デンマーク	52,376
スペイン	195,288	ニュージーランド	44,357
スイス	136,219	アイルランド	40,200
オランダ	105,471	ポルトガル	26,965
スウェーデン	86,662	フィンランド	23,873

＜出所＞「OECD Data：Permanent immigrant inflows」
https://data.oecd.org/migration/permanent-immigrant-inflows.htm（2017年 2 月15日閲覧•取得）

jeunes professionnels）が締結されており、労働者には個別で入国・滞在の条件が規定されている[3)]。表 2 はフランスにおける移民の出生国を記している。国別でみるとアルジェリア、モロッコ、ポルトガル出身者と続き、地域別でみた場合はアフリカ地域出身者の移民が最多であることがわかる。

統計上の数字は現実からは遠く、正式な滞在許可証を持たない外国人（サン・パピエ）の数をつかむのは事実上不可能である。またサン・パピエがすべて不法入国者ではなく、多くは観光ビザで入国し、正式な手続きを待っている人々である（ジョリヴェ 2003）。

表 2 によると、アルジェリア、モロッコ、ポルトガルからの移民が突出して多い。これには理由がある。フランスでは、「栄光の三十年」（1945～75年）の終わりに安価な労働力が必要とされ、

表 2　フランスにおける移民の出生国（2013年）

国名	移民数	
ポルトガル	606,447	2,121,624
イタリア	288,418	
スペイン	245,104	
その他の EU 諸国	707,394	
その他のヨーロッパ諸国	274,261	
アルジェリア	759,757	2,523,946
モロッコ	709,001	
チュニジア	258,597	
その他のアフリカ諸国	796,591	
トルコ	248,616	248,616
その他の国々	825,576	825,576
合計	5,719,761	5,719,761

＜出所＞「Immigrés par pays de naissance」
https://www.ined.fr/fr/tout-savoir-population/chiffres/france/immigres-etrangers/immigres-pays-naissance/（2017年 2 月18日閲覧・取得）をもとに筆者加筆。

3）「Accords bilatéraux sur les migrations professionnelles et échanges de jeunes professionnels」
http://www.immigration-professionnelle.gouv.fr/proc%C3%A9dures/accords-bilat%C3%A9raux-et-%C3%A9changes-de-jeunes-professionnels（2017年 2 月16日閲覧・取得）

スペイン、ポルトガル、マグレブ諸国から大量の移民が集まった（ジョリヴェ 2003）。

移民政策においてフランスで大きな転換期となったのは、以下で記している2003年、2006年、2007年の移民法に関する法律の制定である。

・2003年「入国管理およびフランスにおける外国人の滞在および国籍に関する法律（LOI n° 2003-1119 du 26 novembre 2003 relative à la maîtrise de l'immigration, au séjour des étrangers en France et à la nationalité）」
・2006年「移民および統合に関する法律（Loi n° 2006-911 du 24 juillet 2006 relative à l'immigration et à l'intégration）」
・2007年「移民、統合および庇護の制御に関する法律（Loi n° 2007-1631 du 20 novembre 2007 relative à la maîtrise de l'immigration, à l'intégration et à l'asile）」

こうした法律によってこの時期フランスでは新たな移民政策として「移民流入の制御」、「選択移民の促進」、「移民の統合」を掲げ、①適正な移民流入、不法移民の対策を強化するとともに、②国が必要とする有資格労働者や才能が優れている者、学生などの選択移民の促進し、③新たな移民とフランス社会を統合させていこうという総合的な政策を打ち出したのである[4)]。これにより、優れた外国人以外の滞在資格は厳格化されることになった。

一連の移民政策によって、不法に滞在していても一定年数（10年）滞在していることが証明できれば、滞在許可書が発行される規定も廃止され（高山 2016）、従来許可を得られた者の許可が下りず、不法滞在者が増加することになった。こうした動きに対して、不法滞在者を雇用していた企業の労働組合や支援団体はストライキなどを実施し、合法化を求めた。その結果、人材が不足している職業に限り新たな基準が設けられることになった[5)]。

このようなフランスの移民政策は少なからず、国内で働く労働移民者やフランスへの移民を目指す者にとって不満を生む原因となったと推察できる。また、近年の難民の受け入れおよびそれに伴う労働市場の圧迫も、難民問題が表面化する以前にフランスに入った移民者の不安を煽る形となっている。

（3）最近のフランスにおけるテロ事件と移民第二世代に関する報道

フランスでは、移民は三つの地域に集中している。パリを中心とするイル・ド・フランス地方、リヨンを中心とするローヌ・アルプ地方、マルセイユを中心とするプロヴァンス・アルプ・コートダジュール地方である（ジョリヴェ 2003）。

ISIS に呼応する形で2015年11月13日にはパリ市街と郊外で「パリ同時多発テロ事件」が発生した。首謀者としてクローズアップされたのはマグレブ系移民であった。この事件の背景として、フランスで生まれたアフリカ系移民第二世代がフランス社会の中で孤立感を深めていることが報道で取り上げられるようになった。雇用の差別を受けるなどして「居場所」のない若者たちは、

4）「在日フランス大使館：フランスの移民政策」http://www.ambafrance-jp.org/%E3%83%95%E3%83%A9%E3%83%B3%E3%82%B9%E3%81%AE%E7%A7%BB%E6%B0%91%E6%94%BF%E7%AD%96（2017年 2 月16日閲覧・取得）
5）「労働政策研究・研修機構：主要国の外国人労働者受入れ動向（フランス）」http://www.jil.go.jp/foreign/labor_system/2015_01/france.html#link_01（2017年 2 月20日閲覧・取得）

社会に受け入れていないという思いを強くしていく。このことがISISへ傾倒していく遠因になっているともいわれている。2016年、7月にプロヴァンス・アルプ・コート・ダジュール地方のニースでもテロ事件が起きている。犯人はモロッコ系フランス人だった。

2．境界維持のためのディアスポラの戦略

（1）ディアスポラの定義とムリッド

本稿では、フランスに移動したアフリカ系ディアスポラの一事例として、セネガルのムリッド・イスラーム共同体をとりあげる。本章では「移民」という用語は使用せず、「ディアスポラ」という用語を使用する。「移民」とは受入国側の視点からの見方から発生した概念であり、これに対し、「ディアスポラ」は国際移動する集団の側に主軸を置いた概念である。

まず、ディアスポラとは何かを明確にしておきたい。ブルベイカーはディアスポラの定義について以下の3つの基準を示している。

●第一の基準：空間上の「離散」

今日もっとも広く受け入れられている基準であり、しかも一番わかりやすい基準である。広義には国境を越えてさえいれば、どんな形の空間的な離散にも当てはまる（Brubaker 2005＝2009：382）。後に述べる先行研究、筆者の調査でも明らかなように、ムリッドは故郷セネガルから周辺のアフリカ大陸内、欧州、北米、アジアへとコミュニティを拡大している。したがって、第一の条件に該当する。

●第二の基準：「郷土志向」

実際の郷土ないしは想像上の郷土への志向である。この基準は初期の議論においてことさらに強調されていた。これに対して、最近の議論では、郷土志向が重視されない場合もある。（Brubaker 2005＝2009：383－384）この厳密な定義には、ユダヤ人の経験自体に見られる多くの側面が当てはまらないのである。これは、離散したアフリカ系やカリブ系や南アジア系の人びとの経験にも同じくあてはまらない。脱中心化された水平方向の絆は、起源／帰還の目的論を巡って形成された絆と同程度に重要である（Clifford 1994：305－306）。ムリッドの事例では、家族が暮らし里帰りする場所、いつかは帰る場所としての「郷土」であり、信仰の向かう場所としての「聖地」も「郷土」に含まれる。現代において、トランスナショナルな移動をするムリッドにとっての「郷土」はインターネットを通じて日常的に想起される場所である。

●第三の基準：「境界の維持」

ホスト社会に対する独自のアイデンティティの保持に関わる。境界の維持は、ほとんどの説明において、ディアスポラにとって不可欠の基準とされている（Brubaker 2005＝2009：385, Armstrong 1976, Safran 1991：83, Cohen 1997：24）。しかし、この点に関して、ディアスポラ研究の場には興味深い分裂が見られる。通常、境界の維持やアイデンティティの保持といった要素は強調される傾向にあるが、その一方で、ハイブリディティ、流動性、クレオール化、混合主義といった要素が強調される。こうした対抗的思潮は、トランスナショナリズムに関する研究に顕著にみられるが、この種の研究はここ数年、ディアスポラに関する研究とも融合する傾向にある。すなわちディアスポラの文献は、「境界維持」と「境界浸食」との間に緊張が見られるのであ

る（Brubaker 2005＝2009：386）。ムリッドの事例では、移動歴が浅いこともあってか「境界維持」の側面が強い。移動先フランスでの社会統合の過程でどう変化していくのかは、今後の動向を待つほかはない。

ブルベイカーは、さらに「境界維持」という基準についてもう一つの論点があるという。それは、長期間にわたって起こるはずの事柄である点である。移住者自身が境界を維持するということは、たんに予期される事柄に過ぎないが、ディアスポラの存在にとって関係の深い問いとは、「境界が二世代、三世代、そしてそれ以上にわたって維持されるとすれば、それがどの程度、そしてどのような形で維持されるのか」である。古典的なディアスポラは、長期間にわたって持続する現象であった。だが、今日指名されて存在することになったさまざまな即席のディアスポラが、そういった多世代にわたる持続力をもつかどうかはけっして自明のことではない（Brubaker 2005＝2009：385－386）。

本稿で取り上げるムリッドの第二・三世代についての実際のケースはごく少数であるが、筆者の関心は、ムリッドが境界維持のために行っている戦略にある。この点は、受入社会の政策、システムによって状況が異なるため、調査地ごとに詳細を検討しなければならない。事例としたマルセイユは、ムリッドの移動の歴史の長さから興味深い。

筆者は、ムリッド・イスラーム共同体がセネガルから各地に移動し拠点形成しながら発展している「新興の」交易ディアスポラであることを明らかにした（榎並 2016）。故郷から離散する交易ディアスポラが共同体を維持していくためには、移動先への同化を避け境界維持をはかる必要がある。移動先でいかに連帯意識を醸成していったのか。ムリッド・イスラーム共同体の連帯意識は、移動先での日常的な信仰実践と相互扶助の場としてのダイラ（信徒会、男性中心）を通してつくられ維持されると先行研究では指摘されている。しかし、果たしてそれだけであろうか。他にも日常的に連帯意識を醸成する「場」「空間」があるのではなかろうか、事例から検討したい。

（2）ムリッドとは何か

ここで、事例としたムリッド、およびムリッドの国際移動に関する先行研究について簡単にふれておく。ムリッド・イスラーム共同体（英：Murid Islamic Community，仏：la Communauté mouride）は、セネガルで誕生したイスラーム共同体の一つで、その信徒はムリッド（Mouride）と呼ばれる。セネガルの人口1,455万人の95％がムスリムと言われる。セネガルのイスラーム共同体の大半がスーフィズムの流れを汲んでいるという（苅谷 2012）。ムリッド・イスラーム共同体は1883年頃に創設されたが、その後急激な成長を果たし、セネガルの政治経済に大きな影響を与えている。アフマド・バンバ（Ahmad Bamba）という一人のスーフィーの周りに形成された小集団から発展し、現在は400万人の信徒数を抱え（Babou 2007）、国民総数の約３割を超え（小川 2010）、教団関係者によると現在も信徒数は増加し続けているという。ムリッド・イスラーム共同体の成立はそもそもフランス植民地政府がバンバに従う人びとを恐れ、1895年にガボンへ流刑にしたことで人びとの信仰が高まり、1902年に流刑地から帰国したことが「奇蹟」と語られるようになったことが契機となっている。マラブー（marabout：宗教指導者）に対する聖者信仰、強固な教団組織と信徒の結束力、教団指導者の世襲制とマラブーの階層構造等を特色に持つ。ムリッド信仰は、イスラーム教といってもいわゆる聖者信仰の傾向が強く、各信徒は信奉するマラブーのタリベ（talibe：信徒）という位置づけである。バンバまたは信奉するマラブーの肖像画を家に飾り、ペンダントとして身に付ける者も多い。同じマラブーを信奉するタリベが形成する組織

はダイラ（dahira）と呼ばれる。この他、ダイラは職場、学校、地域など重層的に組織されている。マラブーは人生のガイドである、と人びとは言う。マラブーは、聖地トゥーバ（Touba）のカリフ（khalif：開祖バンバの後継者）を頂点とする階層構造を形成している。こうした正式なタリベ以外にも「自称」ムリッドが多く存在するようである。

バンバの帰還（1902年）以後、マラブーへの絶対的な帰依と労働への強い価値づけが教えられ、仏植民地政府は、ムリッド・イスラーム共同体を介し落花生生産をさせるようになり、ムリッド・イスラーム共同体とフランス植民地政府の相互協調関係が築かれた（小川　2010）。ムリッドは次第に農村部から都市に流出し、市場や運輸などのインフォーマル・セクターにも従事するようになり、都市移住と相互扶助のためダイラを自然発生的に結成し結束を高めたという。地方ではダーラ（daara）と呼ばれる農業共同体を基盤に落花生栽培を強化していったが、都市ではダーラの代わりにダイラを形成し、信徒同士で集まり、生活上の問題を助け合う場、教義を学ぶ場、祈りの場とした（小川 2010）。その後、パリ、ニューヨーク、ローマを中心に欧米へ移動、また商品の買付のためジェッダ、香港、台湾にも移動した（小川 1998）。

ムリッドの欧米への移動に関する研究によると、旧宗主国フランスのマルセイユで布地生産販売をしたのが契機となり、1980年代には問屋・不動産業へと成長した。ムリッドは商品とともに欧州・アフリカ都市へと広がり、アメリカ・アジアへも拡大していったという。ムリッドの交易ネットワークは商品を介して同胞とともにビジネス相手を取り込んで構築されていった（Bava 2003）。交易ネットワークは移動先各都市と聖地トゥーバとを結ぶ宗教ネットワークにリンクしている（Bava 2005）。

以上の先行研究と、アジアでの活動に関する筆者の調査から、ムリッド・イスラーム共同体を宗教共同体であると同時に、新興交易ディアスポラとして位置づけた（榎並　2016）。

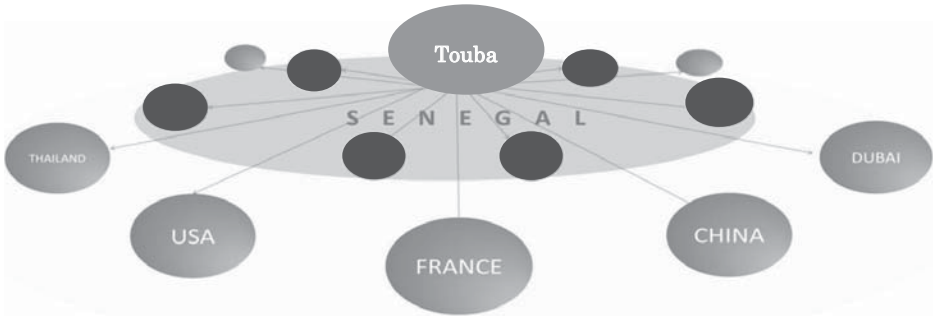

図 2　ムリッド・イスラーム共同体の概念図

中心の● Touba はムリッドの聖地を表す。中心付近の●はセネガル国内のダイラを表し、周辺の●はセネガル以外のダイラを表す。横のネットワークが確認できていないため、聖地（Touba）がノードとなった放射状のネットワークを図式化したもの。このネットワーク全体を筆者は「ムリッド・イスラーム共同体」として捉えている（これまでの調査をもとに筆者作成）。

図 2 は、これまでの調査から世界各地の拡大するムリッド・イスラーム共同体のイメージを筆者が図式化したものである。ムリッド・イスラーム共同体の中心にある●は、セネガルのトゥーバにある聖地を示す。国境を越えて拡大するムリッド・イスラーム共同体は、聖地を中心に他の●で示した各地のダイラによってネットワーク化されていると考えられる。このネットワークは人の往来のみならず、寄付などの送金ネットワークにも転用される。但し、ダイラ間の横のネットワークについてはまだ検証できていない。

（3）ムリッドのフランスへの移動プロセス

1970年代から80年代を通して、ムリッド・イスラーム共同体は基盤を農村部から都市へと移すことになった。農村の宗教であったムリッド教は、その農民の都市への移動とともに都市の宗教へと様変わりした。

ダイラの重要性は都市への移動とともに高まっていった。70年代にはセネガルの中小都市30か所に教団支部としてダイラが創設されていた（Salem 1981：26）。ダーラとダイラはムリッド・イスラーム共同体の組織基盤となった。都市に定着したムリッドは首都ダカールの市場で商業、特にインフォーマル・セクターで活躍し、商品買付のために海外に進出するようになっていった。

商人として海外に移動する中で、彼らは海外の各地において、言葉の困難、習慣の違いによる困難などを乗り越えるために、仲間同士で集いはじめる。仲間同士の助け合いはダイラにおいて基本とされた鉄則の一つである。70年代のなかごろからニューヨーク、マルセイユ、パリ、ローマなどにムリッド商人が多く住む地区が形成されてゆくのである。フランスでは1980年代になるとマグレブ諸国や西アフリカ諸国からの労働者の流入を厳しく規制していたが、イタリア、アメリカはそうではなかった。ムリッドはニューヨークのほか、ローマなどに移動し、イタリアから陸路で国境を越えてフランスに密かに移動した（Ebin 1995）。

フランスでのムリッドの定着、活動状況はアメリカのそれをはるかに上回る。パリの観光名所[6]、たとえばモンマルトル寺院前の広場、ノートル・ダム寺院周辺、エッフェル塔周辺などで土産物などを売るアフリカ出身者を目にする。彼らのほとんどがムリッドと考えてよい。こういったムリッド商人が存在するのはパリだけでなく、マルセイユからイタリア国境にかけてのすべての都市、ストラスブール、ボルドーなどの大都市、要するにフランス中のほとんどの都市で彼らは活動している（小川 1998）。

フランスに渡ったセネガル人の中には留学生も多かった。セネガルはフランスの植民地支配を受け、1960年４月に独立を果たした。独立後、フランス式教育システムを踏襲しているセネガルでは、多くの留学生がフランスの大学へと進学した。もともと小学校から公教育をすべてフランス語で学んでいるセネガルの子どもたちにとって、高等教育を受ける手段として最も近い進学先がフランスの大学であった。セネガルの高等学校を卒業し、バカロレアル（大学入学資格）に合格すると、フランスの大学への入学が許可されるシステムであったからである。カネ（Kane, O）によると、アメリカではなくフランスに留学したのは、フランス政府、セネガル政府からの奨学金を受給できることも大きな理由であったという。20世紀を通じて、アフリカからアメリカの大学への留学生の主な出身国は、ガーナ、マラウイ、ナイジェリアなど英語圏アフリカの国々であった（Kane 2011：60）。

ムリッドはもともと農民出身者が多く、農村から都市へ移動しインフォーマル・セクターに従事したのも学歴がなかったためだという。ニューヨークへ移動したムリッドに筆者がインタビューした際にも「学歴がなく、運転免許一つで就業できるタクシー運転手になった」という回答が多かった。したがって、留学によりフランスへ移動したムリッドは当初はほぼ存在しなかったと考えられる。時を経て、商業を通じて経済力を持つようになり、そうした高学歴のムリッドも増え

6）2015年６月に筆者もパリで調査を実施し、エッフェル塔周辺でインタビューした商人グループは比較的若いムリッド男性15人程度で、皆同じような土産物（エッフェル塔の形のキーホルダー等）を手に持ち売り歩いていた。モンマルトルの丘ではムリッドは確認できず、比較的年配の男性が多く見られた（インタビューしたセネガル出身者はティジャンであった）。ムリッドについて尋ねると、丘を下ったあたりのシャトールージュ地区にあるムリッド経営の店舗を紹介された。周辺にはムリッド経営のレストラン、美容室などもある。パリでも月１回、ダイラを開催しているとのことであった。

ている。あるいはセネガルの大学の中にダイラが結成され、新たに学生の改宗がすすむにつれ留学による移動も増加していると考えられる。

ムリッドの国際移動に関する先行研究[7] は欧米に定住したムリッドと故郷・移動先とのつながりを対象とした研究が中心である。

バーバ（Bava）のマルセイユのムリッドを対象とした研究によると、ムリッドの欧州への移動は、マルセイユにおける布地の生産販売が契機となったという。1980年代、ムリッドが布問屋・不動産業へと成長する過程で、商品の流通とともにムリッドもヨーロッパ、アフリカの各都市へと広がっていった。その後、さらにアメリカ、アジアへも拡大していった。ムリッドのビジネス・ネットワークは商品と精神的紐帯（信仰）により他の組織・個人を取り込んで構築したネットワークである（Bava 2003）。アフリカ大陸内および欧米への移動における拠点都市はマルセイユ（アフリカから欧州への入口）、ニアメ（サブ・サハラ交易の入口）、カイロ（ムスリムの都）で、彼らのビジネス・ネットワークは移動先各都市と聖地トゥーバ（Touba）とを結ぶ宗教ネットワークにリンクしている（Bava 2005）。

フランスへの移動は、ムリッドのアフリカ大陸外への移動としては最も古い。したがって、フランス生まれの移民第二世代、第三世代のムリッドが存在している。こうした新しい世代にムリッドは「境界の維持」という点においてどのような教育をしているのであろうか。筆者のこれまでの研究から、信徒組織であるダイラが関係しているのではないかと考えた。ダイラに関しては先行研究でも注目されている。そこで、マルセイユの事例をみていく。

（4）マルセイユのムリッド

マルセイユ（Marseille）は、フランス最大の港湾都市で、プロヴァンス＝アルプ＝コート・ダジュール地域圏（Provence-Alpes-Côte d'Azur, PACA）の首府、ブーシュ＝デュ＝ローヌ県の県庁所在地である。マルセイユの人口は150万人（2016年 INSEE：L' Institut national de la statistique et des études économiques フランス国立統計経済研究所による）で、フランス第三の都市である。マルセイユの歴史は古く、小アジアから来た古代ギリシアの一民族であるポカイア人が紀元前600年頃に築いた植民市マッサリア（マッシリア）にその端を発する。マルセイユは、南フランスにおける貿易・商業・工業の一大中心地である。近接するトゥーロン軍港に対して、貿易港を有する。これはフランスおよび地中海で最大、ヨーロッパでは第三の玄関港として、110航路、120カ国の360以上の港と連絡しているという。植民地時代から現在に至るまで、旧仏領アフリカ諸国からの玄関口となっている。こうした背景から、アフリカからの移民が多く、特に対岸のアルジェリア系が突出しているといわれる。確かに街を歩いていても、アラブ系の男女の姿が目立つ。

写真１　ノアイユ市場周辺にあるムリッドの商店の一つ（2017年３月筆者撮影）

セネガル出身者がマルセイユに移動したのは植民地時代で

7）フランスのムリッドに関してはBava（2000, 2002, 2003, 2005），Diouf（2000），Ebin（1995）、イタリアのムリッドに関してはRiccio（2006），アメリカのムリッドに関してはBabou（2002），Kane（2011）が詳しい。

ある。特に、南部のカザマンス出身者は、もともと船乗りとして多く来訪した。その後、港や駅での清掃員などの定職に就き、数十年に及ぶ滞在になった者もいる。筆者がインタビューした女性は60代、パリ行の起点となるサン・シャルル駅の清掃員を40年近くしている。そろそろ引退しカザマンスに帰国したいという。

セネガル出身者の国際移動というと「ソニンケ」（エスニック・グループ）が名高い。ここマルセイユにも、最初に来訪したセネガル人はやはり「ソニンケ」であった。セネガルでは北のモーリタニア国境、南のギニア国境をフータ地方と呼び、フータ地方を居住地とするエスニック・グループを総称して人びとは「フータ」と呼ぶ。そのうちの１つのエスニック・グループが「ソニンケ」である。他に「プル」「トゥクルール」などが該当する。筆者がセネガル出身者にきいたところ「ソニンケは村から海外に移動し、セネガルの都市では活動しない」「グループ内の結束力が強い」といったイメージを持っているようである。

近年になり、セネガル出身者の国際移動の潮流は変化してきている。国際移動の役者に「ムリッド」が登場し、拠点を形成しつつあることが海外の各地で報告されている。ムリッドとソニンケの違いは、ソニンケは国際移動を民族の伝統とするエスニック・グループだが、ムリッドはイスラーム系の宗教共同体である。ソニンケは血縁をネットワークの絆とし閉じたコミュニティである一方、ムリッドは信仰を基盤としたネットワークであるため、そもそもコミュニティの規模は拡大可能である。

３．連帯意識を醸成する場・空間

（１）ダイラとは何か

ムリッドについて人びとが語るとき、必ず登場するキーワードがある。それは「ソリダリテ（仏語：solitalité 英語：solodality」である。日本語では「連帯、団結、結束」と訳される。つまり、自身はムリッドでムリッドにとって大切なものは「ソリダリテ」だと語る場合には、ムリッド・イスラーム共同体としての連帯、団結、結束を示している。本稿では、この概念を日本語に置き換えず、ムリッド自身が使用する言葉である「ソリダリテ」と表現する。

いわゆるディアスポラが国際移動することにより、移動先社会への「同化」というリスクを負うことは宿命である。そこで、ディアスポラの境界性維持のため同郷団体的なコミュニティが必要になってくる。このことは数多くの移民コミュニティの事例にみられる。

ムリッドの場合、共同体拡大のプロセスの中で、本国内の都市ではダイラを結成した。故郷を離れた都市生活の中で、信徒の連帯意識を醸成する場としてダイラの活動が重要となってくる。本国セネガルでのダイラは地域共同体、職場や学校で組織される。ムリッド・イスラーム共同体には複数の宗教指導者の階層構造が存在しており、各指導者には追従する信徒コミュニティ（これもダイラと呼ぶ）が存在する。こうして１人の信徒が複数のダイラに所属することで、ムリッドとしての自覚もますます高まる。移動先でのコミュニティでも、信徒数の多い都市ではケル・セリン・トゥーバ（ウォロフ語[8]：Keur Serigne Touba＝「教祖の家」）と呼ばれるモスク兼宿泊施設を設置している。日常的な礼拝から宗教行事を行う場として活用されるほか、新規移民や宗教関係者が短期滞在用に利用している。

8）セネガルは多民族国家で、最も人口の多いウォロフの言語がフランス語とともに公用語となっている。ムリッドはもともとウォロフの宗教とも言われている。

筆者はセネガルの聖地トゥーバ、セネガル農村の他、広州、ニューヨーク、埼玉県朝霞市でダイラの参与観察を行った。農村では週に一度（木曜日深夜）、輪番制で自宅開催する。男女別に敷かれたゴザの上に着席し、一人が音響設備を用いてハサイード（khassaid：詠唱）を唱え全員で唱和する。片耳に手を当て、開祖バンバをはじめ聖人名を挙げ称える。詠唱の途中、カフェ・トゥーバ（café touba：スパイス・コーヒー）が提供される。信徒各自が100セーファーフラン（20円程度）程度の寄付をし、役員がそれを管理する。通常、22時頃から開始され、深夜１時過ぎまで続けられる。帰り道、仲間とともに月夜の村を歩く爽快感と「ソリダリテ」を筆者も体験し、信徒がダイラに参加する意味を少しであるが理解することができた。

欧米のムリッド研究においても、ダイラに注目した先行研究がある。ロス（Ross）は欧米におけるダイラをマッピングした（Ross 2011）。バブー（Babou）は、ニューヨークでのムリッドの経済的成功の原動力はダイラでの実践と教育により培われた信仰と連帯意識であるという（Babou 2002）。バーバは、フランス生まれの若者（第二、第三世代）にムリッドとしての生き方を伝えるためダイラを宗教行事と信徒同士の交流の場にしているという（Bava 2003）。先行研究では、いずれもムリッド・イスラーム共同体維持のためのダイラの重要性が指摘されている。筆者のこれまでの調査でも、中国の広州、UAE のドバイでもダイラは開催されていることを確認している（榎並 2016）。

（２）精神的な拠所としてのダイラの役割

海外の移動先社会への適応には、出身村とエスニック・グループの違いを越えたムリッド・イスラーム共同体としての連帯が有効であるが、その一方で、世代を超えて変わらない交易ディアスポラとしての境界性保持も重要な課題であり、ダイラ活動は移動先での適応促進と境界性保持という二つの側面において有効である（榎並 2016）。

写真２　マルセイユにあるムリッドのモスク内部
（2017年３月筆者撮影）

特に、前者の「適応」の側面からみたダイラの機能としては、移動先での精神的サポートが挙げられる。一般には、移民が孤独やストレスを抱えないよう故郷の家族は精神的サポートもし続けると言われる。ムリッドの場合、精神的サポートは故郷の家族に加え、移動先ダイラの仲間も担っている。セネガルの大家族の中で生育した移民一世にとって外国での孤独感は強烈で、ともに異国の地でビジネスを展開する同胞との関係は重要である。筆者の調査によると、広州でもニューヨークでも、ムリッドはダイラに欠席が続く仲間がいると自宅を訪問し困っていることがないか確認するという。ダイラの欠席者は病気や金銭的なトラブルを抱えている場合が多く、ダイラ仲間が金銭的支援をする場合もある。金銭面もさることながら、何よりも、移民にとって異国での孤独感から解放され、仲間とともに移動先社会に適応していけることに大きな意義があると言える。同時に、ダイラを通じた本国との宗教ネットワークと信仰実践は、ムリッド・イスラーム共同体としての境界性保持に大きく貢献しているとも言える。

マルセイユのムリッドは公的な場所としてダイラ（モスク、宗教行事、子どものコーラン学校、

集会所としての機能）を保持している。信徒の寄付から賃借料を支払い、ノアイユ市場の裏通りの建物を確保している。ノアイユ市場周辺にムリッドの商店、レストランなどが集中しており、毎日の礼拝も商店から近いので利便性が高いのが理由である。

写真３　モスクでコーランを学ぶ子ども達と筆者、背景は教祖バンバの肖像画（2017年３月モスク関係者撮影）

（３）第二世代への教育の場としてのダイラの役割

マルセイユのダイラ調査で、子どもたちへのコーラン教育の現場を見ることができた。クラスは中学生、小学生で分かれていた。筆者が見学したのは水曜日の夕方で、フランスの公立学校の授業後、モスクで教師からコーランの暗誦と解説の授業を受けていた。中学生クラスが終わり、待機していた小学生への授業が開始された。順次、父親が迎えに来て帰宅していった。教師はモスクの管理者で、フランスの大学留学経験があるという。両親が信仰に熱心な家庭では、こうしてモスクでのコーラン教育に参加させている。こうして、フランス社会の中でもムスリムであり、ムリッドである自覚を子どもたちに持たせるための教育を行っている。子どもたちも懸命にコーランの暗誦をし、フランス語の解説に耳を傾けていたのが印象的である。

（４）ムリッド・レストランの役割

筆者のこれまでの研究で、広州およびドバイの事例から、ムリッド・レストランが移動先社会（長期滞在ムリッド、セネガルなどアフリカ出身者、現地のビジネス相手）と出身社会（短期買い付け、家族）を交易ネットワークによってつなぐ仲介の場を提供していることが明らかになった（榎並 2016）。

レストランは本来の目的であるところの、家族と離れて移動先で孤独な人びとにソウルフードを提供し同胞との語らいによって精神的安定を与える機能を果たしているのみならず、仲介業を通じて交易ネットワークをつなぐノード（結節点）ともなっている。筆者は、調査地では必ずムリッド・レストランを何度か訪れ、店内で参与観察しインタビューを試みている。マルセイユにもセネガル・レストランを標榜するものを４軒確認したが、うち２軒はムリッドが経営している。他にも看板のないデリバリー方式のレストランが存在する可能性はあるが特定するには至らなかった。

筆者がレストランに注目する理由は移民ネットワークのノードとして機能している事例が見られるからである。このことは他のエスニック・グループの移民ネットワークにおいても同様であることが指摘されている。例えば、和崎らによると滞日カメルーン人経営のレストランが自動車輸出などの商取引のための情報交換の場として重要であるという（和崎ほか 2008）。ムリッド・レストランが祖国の味を求める以外にも交易の情報交換の場として機能していることは、広州、ドバイの事例でも確認している（榎並 2016）。

マルセイユの場合はどうであろうか。Ｔレストランの事例を見てみよう。Ｔレストランはノアイユ市場に近い裏通りにある。客として訪れセネガル料理を堪能しつつ、店員から話を訊いた。

店員Ｆ（20代女性）は、セネガル北部のルーガ出身で、フランスに栄養士の勉強のために来訪

した。レストランの経営者はＦの母方の叔母である。レストランは３年前に開店した。経営者は他にも会社を経営しているという。夜は不用心だからであろうか、男性が店番のような形でいる。このムリッド男性は大型車両の運転手で、以前はドイツにいたとのことである。他に、アフリカ系フランス人らしき４人組の客がいた。別の日に訪れた際には、客ではない若者、親族らしき男性が来ていた。この店はビジネスの情報交換、貿易仲介の機能というよりは、ムリッドの居場所の一つになっている。というのは、仲介機能を担う別の会社が存在しているからである。

（５）若者が集まる「サロン」の役割

ダイラが公的な礼拝、宗教行事を行う場だとすると、こうしたレストランなどはインフォーマルな場と言える。他にも私的な場として、筆者が「サロン」（仏：salon）と呼ぶものがある。元の意味はフランス語で「客間、リビング」である。筆者がいうところの「サロン」は場所の特定はしていない。もしセネガルの村であれば庭のマンゴーの木陰を連想するし、都市であれば路上であっても良い。要するに人びとが私的に集う場所、たまり場のことを指している。

写真４　Ｂが経営するアフリカ布・服の販売店。奥にある作業場は夜になるとムリッドの若者のサロンになっている。（2017年３月筆者撮影）

セネガルの生活文化の中には「アタイヤ」（Ataya）という習慣がある。毎日、遅めの昼食の後の時間（あるいは夕食の後も）をマンゴーの木陰に椅子を並べ、ゴザを敷き、お茶（アタイヤ）を淹れる。アタイヤは緑茶を炭火などでじっくりと煮出し砂糖を混ぜてカラメル状になったところで、小さな耐熱ガラスの容器に注ぎ、メンバーで回し飲みをする。一番茶、二番茶、三番茶が回るまで１～２時間、気の置けない仲間でおしゃべりをしながら過ごす伝統的な習慣である。村のあちこちに私的なアタイヤのグループが存在する。メンバーはほぼ固定で、筆者もセネガル滞在当時は昼・夜で別のグループに参加していた。村ではよろず屋（仏語：la boutique）の店先、村人の家、公務員官舎などで行われていた。商店主が外出できないので、友人がおしゃべりをしにやって来るケースも多い。村から地方都市に出て行ってもこの習慣は引き継がれ、やはり商店の店先などでアタイヤをする人びとをしばしば見かける。海外に移住しても、やはりアタイヤの習慣は引き継がれているようである。

ムリッドの場合は、アタイヤの代わりに「カフェ・トゥーバ」というスパイスを混ぜたコーヒーに砂糖をたっぷり入れたものが提供される。このカフェ・トゥーバはムリッドの宗教行事でも振る舞われ、各地のセネガル移民向け食糧品店には必ず置いてある。筆者はパリのモンマルトル周辺で、カフェ・トゥーバを売り歩く男性を目撃した。ニューヨークでもパリでもムリッドが経営する商店でスパイスを配合した特別なこのコーヒーが販売されているのを確認している。基本的にアルコールを禁止されているムリッドは、異国の地においてもお茶・コーヒーが媒介する私的グループに居場所を見出し、仕事を終えると「いつもの場所」に向かうのである。

筆者はこの私的な居場所「サロン＝ salon」を、連帯意識を創出する場として重視している。

マルセイユのあるサロンを紹介する。このサロンはアフリカ布の販売とオーダーメイドの服を仕立てる店の奥にあった。参与観察のために何日か通ったこの店は、客の出入りも多く、大変居

心地がよかった。外部者の筆者ですら居心地の良いこの空間は、おそらくムリッドにとっては故郷を感じさせる場になっていることは容易に想像できる。

店の経営者（40代女性）Bに話を訊いた。Bは、2000年にセネガルの古都サン・ルイ市（St. Louis）にある国立大学 Université Gaston Berger de Saint-Louis で修士を取得、その後、アメリカのフロリダ州の大学で MBA 取得。アメリカで結婚し離婚後、セネガル系フランス人と再婚し、フランスに滞在している。2014年に貿易会社を起こし、2年前にレストランを、数か月前に服屋を開店したという。

Bはムリッドの信仰について、次のように語った。

「教祖バンバは、信徒のために人生の教訓を多く書き残してくれた。マルセイユでも、ダイラで子ども達に教祖の教えを勉強させている。ハサイード（ムリッド独特の読経、宗教指導者を称え、教祖の教えを歌うように皆で唱える）はコーランよりわかりやすい。教祖の教えは人生の指針で、人生を前向きにとらえることができる。ムリッドの若者は失業していても前向きに生きている。したがって、ISIS などが誘ってきてもムリッドの若者は心が揺れない。そもそも ISIS もムリッドのことを知らないだろうけど。どんな苦境でもムリッドは前向きに生きることができる。」

さらに、Bの店に夜になると続々と若い男性が集まってくる件について尋ねると、次のように語った。

「若者には、居場所が必要。自分の店にはテイラー（職人、男性）が2人いるが、繁忙期には深夜まで仕事をしてくれている。自分は帰宅するが、彼らは残っている。そこに他で仕事を終えたムリッドの若者たちがやってくる。仕事をしているテイラーにとっても楽しいだろうし、マルセイユに来たばかりの若者にとっても居場所になる。店でパンを用意し、彼らは深夜までアタイヤをしながら語り合い、帰宅していく。彼らの中にはルームシェアをしている者も多い。とにかく、ムリッドにとっては、この「ソリダリテ」が重要だ。「ソリダリテ」があれば、異国の地であっても安心できる。」

Bの語りからは、経営者としてムリッドの若者を温かく見守る視線を感じることができた。こうして、異国の地で心細い思いをする若者は、意図的に「サロン」を創出する同胞の先輩ムリッドに支えられているのである。ダイラという公的な場だけでなく、こうした日常的な集まりでの関係構築が、ムリッドの連帯意識を支えているといえる。

（6）年輩者が集まる路上の「サロン」

マルセイユのベルクール（Belcure）通りにカフェが集中している場所がある。ここを歩くと、路上に設えられたテーブルでマグレブ系移民がお茶を楽しんでいる光景が目に入ってくる。ムリッドの移住第一世代は40年以上前からマルセイユで仕事をし、すでに引退して年金生活をしている者もいるという。この年輩者たちは晴天の日の午後、ベルクール通りに集まり、不定期にサロンを開催しているという。筆者は調査期間中何度か出かけてみたが、あいにく出会うことができなかったが、椅子に座って小物を売る路上商人（セネガルでは男性は Moudou-moudou、女性は

Fatou-fatou と呼ばれる）の年輩の男女と遭遇した。彼らもムリッドだという。

年輩者たちは日曜の夜にダイラ[9] に集まる習慣があるということを前述のＢから聞いた。ノアイユ市場周辺のムリッド商店主へのインタビューにも、マルセイユに来訪して40年以上という話が出てくる。1980年代に労働力としてマルセイユに移動し、フランス国籍を取得、セネガルの家族と行き来をしながら気づけばフランスでの生活が長くなり、そのまま老後をフランスで過ごしているのである。この商店主は、息子をセネガルから呼び寄せて親子ともども店を経営している。

おわりに

本稿で事例として取りあげたムリッド・イスラーム共同体は、セネガルがフランスから独立した後に急激に台頭してきたイスラーム共同体であるとともに、新興交易ディアスポラでもある。信仰もさることながら、むしろ交易により拡大発展したイスラーム共同体だと言っても過言ではない。ムリッドは信仰を中心に集まる固有の場・空間を各地に創出してきた。それが「ダイラ」である。信徒の寄付を集め、本国セネガルの教団からの支援を受け、ニューヨークなどのように土地・建物を購入しているケースさえある。

本稿で調査地として選定したマルセイユはフランスで最も移民の人口比率が高い古い港町である。マルセイユのムリッド信徒は、布教の拠点としてモスク（ダイラと呼ばれている）を賃借し、数グループ（ダイラ）からなる組織をつくりあげ、宗教行事には周辺都市からも信徒が集まるほどの発展を遂げた。本国セネガルからムリッドの宗教指導者を定期的に呼び寄せるなどして、第二世代の教育にも熱心に取り組んでいる。

マルセイユの事例からは、信徒組織関係者、商店主、若者などへのインタビューと参与観察から、マルセイユにおいてもムリッドは信徒コミュニティの中で強い連帯感、ムリッドとしての自覚、生き方の指針を得ていることが確認できた。セネガル出身者の移動の波は幾重にも重なっているため、古参の移民と新規移住者は、別々の場を創り出し、日常実践を行っている。こうした私的な集まりである「サロン」は、公的な集まりである「ダイラ」と同様にディアスポラにとって非常に重要な空間である。なぜなら、この空間はディアスポラにとって故郷と同じだからである。ムリッド・イスラーム共同体がその移動を促進し連帯意識を創出している背景には、公的空間・ダイラでの信仰実践だけでなく、意図的に創出された私的空間・サロンでの日常的な交流があることが見えてきた。

さらに、レストランの他にも夜間の商店が新規に移動した若者たちの居場所になっていることを確認できた。集まってくる当事者にその意識はなくとも、店の経営者である先輩ムリッドは、居場所を無くした若者がテロや犯罪に手を染めないようにとの願いを込め、異国の地での「居場所」を若者に提供していた。こうして、ムリッドの連帯意識は醸成されている。

参考文献

邦文

榎並ゆかり（2016）「アフリカからアジアへ移動する「新興」の交易ディアスポラ－広州・ドバイにおけるムリッド商人の活動事例から」『移民政策研究』第8号、pp.123-136.

小川了（1998）『可能性としての国家誌－現代アフリカ国家の人と宗教』世界思想社.

――――（2010）「セネガル独自のイスラーム教団－ムリディーヤ（ムリッド教団）の創設とその後の発展」小

9）マルセイユのムリッドは、モスクのことも「ダイラ」と呼んでいる。

川了編著『セネガルとカーボベルデを知るための60章』明石書店、pp.34-42.
苅谷康太（2012）『イスラームの宗教的・知的連関網―アラビア語著作から読み解く西アフリカ－』東京大学出版会.
財団法人自治体国際化協会パリ事務所（2011）「フランスの移民政策―移民の出入国管理行政から社会統合政策まで―」CLAIR REPORT 第363号.
ジョリヴェ・ミュリエル（2003）鳥取絹子訳『移民と現代フランス―フランスは「住めば都」か』集英社文庫.
高山直也（2006）「フランスにおける不法移民対策と社会統合」『外国の立法』国立国会図書館調査及び立法考査局、第230号 p.75.
三島禎子（2008）「ソニンケ商人の歴史―砂漠を越え海を渡る人びと―」池谷和信、佐藤廉也、武内進一編『朝倉世界地理講座・大地と人間の物語・アフリカⅡ』朝倉書店、pp.286-299.
――――（2011）「民族の離散と回帰―ソニンケ商人の移動の歴史と現在」駒井洋監修・編著、小倉充夫編著『ブラック・ディアスポラ』明石書店、pp.105-130.
和崎春日、田渕六郎、田中重好（2008）「来住アフリカ人の集合状況と中古車ビジネス―滞日カメルーン人のアフリカン・レストランへの集合と情報交換」『平成16-18年科学研究費補助金研究報告書―来住アフリカ人の相互扶助と日本人との共生に関する都市人類学的研究―』pp.145-157.

欧文

Armstrong, J. (1976). Mobilized and Proletarian Diasporas. *American Political Science Review* 20(2), 393-408.
Babou, C., A. (2002). Brotherhood, Solidarity, Education and Migration: The Role of the Dahiras among the Murid Muslims Community of New York, *African Affaires* 101, 151-170.
Bava, S. (2000). Reconversions et nouveaux mondes commerciaux des mourides à Marseille. *Revue Hommes et migrations 1224, 46-56.*
――― . (2002). De la « baraka » aux affaires: La caption de ressources réligiueses comme initiatrices de nouvelles routes migratoires, *Ville école integaration enjeux* 131, 48-63.
――― . (2003). Les cheikhs mourides itinerants et l'éspace de la ziyyara à Marseille. *Anthropologie et sociétés* 27(1), 149-166.
――― . (2005). Variations autour de trois sites mourides dans la migaration, *Autrepart* 36, 105-122.
Brubaker, R. (2005). The 'Diaspora' Diaspora. *Ethnic and Racial Studies* 28(1), 1-19. 臼杵陽訳（2009）「ディアスポラのディアスポラ」臼杵陽監修『ディアスポラから世界を読む－離散を架橋するために－』明石書店，375-400.
Cohen, R. (1997). *Global Diasporas: An Introduction*, UCL Press.
Diouf, M. (2000). The Senegalese Murid Trade Diaspora and the Making of a Vernacular Cosmopolitanism, *Public Culture* 12, 679-702.
Ebin, V. (1995). International Network of a Trading Diaspora: The Mourides of Senegal Abroad. Antoine P. & Diop, A., B. (Eds.). *La Ville à guichets fermés: itinéraires, réseaux et insertion urbaine.* Paris: ORSTOM, 323-336.
International Organization for Migration (IOM). (2015). Migrants and Cities: New Partnerships to Manage Mobility, International Organization for Migration. *World Migration Report*, 37.
Kane, O. O. (2011). *The Homeland Is the Arena: Religion, Transnationalism, and the Integration of Senegalese Immigrants in America.* New York: Oxford University Press.
Riccio, B. (2006). «Transmigarants» mais pas « nomades» : Transnationalisme mouride en Italie. *Cahiers d' études africaines* 181, 95-114.
Ross, E. (2011). Globalizing Touba: Expatriate Disciples in the World City Network. *Urban Studies* 48 (14), 2929-52.
Safran, W. (1991). Diasporas in Modern Societies: Myths of Homeland and Return. *Diaspora* 1(1), 83-99.
Salem, G. (1981). De la brousse sénégalaise au boul' mich: le système commercial mouride en France,

ディアスポラの連帯意識が醸成される場－マルセイユにおけるムリッド・イスラーム共同体の事例から－
Cahiers d' études africaines 21, 81/83, 267-288.

Web サイト

「国際移住機関：「移民」の定義」
http://www.iomjapan.org/information/migrant_definition.html
「在日フランス大使館：フランスの移民政策」
http://www.ambafrance-jp.org/%E3%83%95%E3%83%A9%E3%83%B3%E3%82%B9%E3%81%AE%E7%A7%BB%E6%B0%91%E6%94%BF%E7%AD%96
「労働政策研究・研修機構：主要国の外国人労働者受入れ動向（フランス）」
http://www.jil.go.jp/foreign/labor_system/2015_01/france.html#link_01
「Accords bilatéraux sur les migrations professionnelles et échanges de jeunes professionnels」
http://www.immigration-professionnelle.gouv.fr/proc%C3%A9dures/accords- bilat%C3%A9raux-et-%C3%A9changes-de-jeunes-professionnels
「Immigrés par pays de naissance」
https://www.ined.fr/fr/tout-savoir-population/chiffres/france/immigres- etrangers/immigres-pays-naissance/
「OECD Data：Permanent immigrant inflows」
https://data.oecd.org/migration/permanent-immigrant-inflows.htm